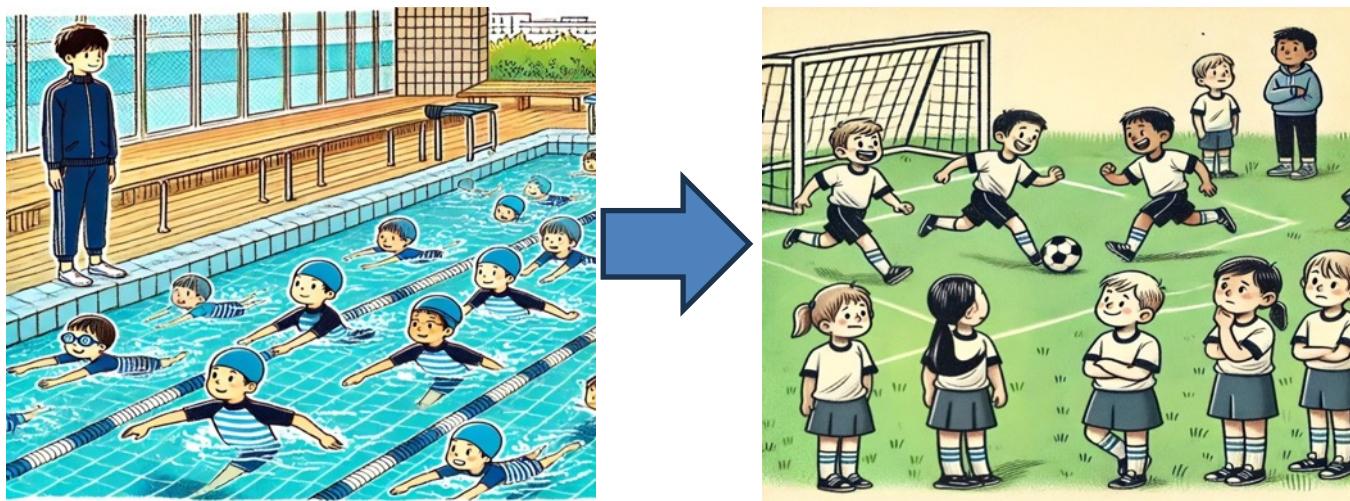


# サッカー教材でスポーツの格差を考える

日田市立高瀬小学校 岩崎 敬

「サッカーは人気のスポーツである」。だから「子どもたちはサッカーが好きである」と、思っていた頃が私にはあります。しかし、普通にサッカーの授業を行うと、得意な子はずっとボールに絡み、サッカーをしない子は全くボールを触れません。そのような授業を繰り返していくと、大半の子はボールを追うことにもしないようになります。

水泳運動とサッカーを比較すると、水泳では上手な子も、苦手な子も泳ぐ時間や泳ぐ機会は同等に確保されます。しかし、多人数で一つのボールを扱う球技領域では、ちょっとした技能差が、学習する時間（プレイ）の格差を生み出してしまう。



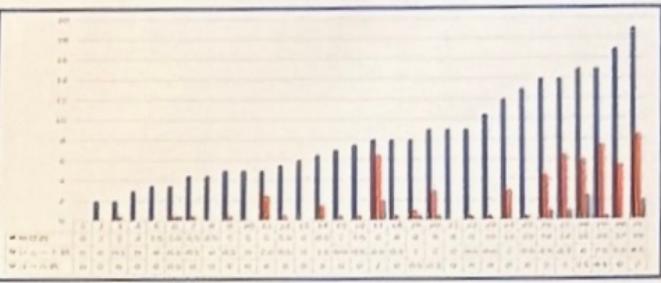
水泳運動では泳力に関係なく学習の場が保障されているが、ボール運動ではボールが一つのため、イラストのようになることもある。

一昨年参加した日本体育科教育学会（順天堂大学）でも長坂は、運動にアクセスできる場を設定するだけでは、スポーツ格差を是正・縮小できないと述べています。

運動にアクセスできる場を設定するだけでは、スポーツ格差を是正・縮小できない。

## 2. 子どもたちにとって必要となる学習

- 運動場面に実質的に参加するということは、誰にとっても保障されるべき学習の権利である。
  - 10回以上ボールに触っているのは、一部の子。
  - シュートを打っているのは、ごく一部の子。
  - 1番と31番のプレー機会の差が過大。



(2023.7 長坂祐哉 日本体育科教育学会)

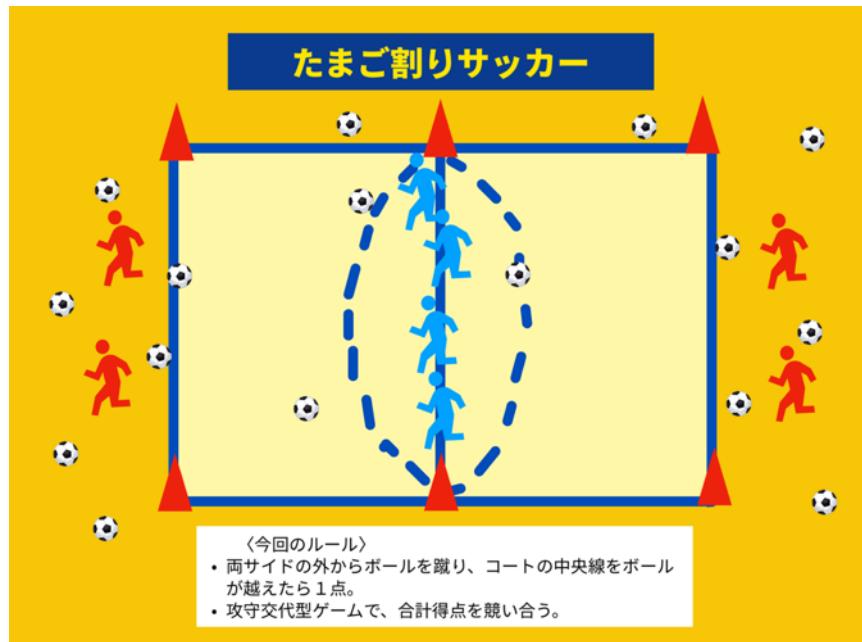
これらのこと踏まえて、体育授業を展開する際に本校で工夫してきたことを整理してみます。

## <低学年：たまご割りサッカー>



本校では新聞紙をガムテープで包んだ手作りのボールがたくさんありますが、それをフロアいっぱいに散りばめ、たくさんシュートを打たせて、ゴールする喜びを味わってもらっています。

安全対策として、上靴が飛んで人に怪我させないように、リストバンドをたくさん準備して、付けさせてています。



ボールをたくさん出しているためシュートの格差はそれほど多くない

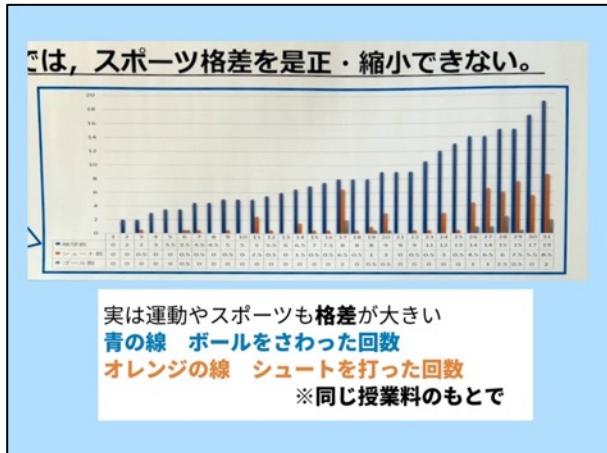
## <中学年：前半はディスクサッカー（2D）>



ボールを踏みつけたら、周りの敵（相手チーム）は離れないといけないという最強ルール。サッカー習っている子は、ボールキープができるので、踏みつける子は多くありません。

※格差是正ルールの一つ

## <中、高学年：サッカーによるゲーム学習>



〈楽しさレベル〉  
レベル1・・・自分が**楽しい**  
レベル2・・・自分もチームのなかでも**楽しい**  
レベル3・・・自分もチームのなかま  
も相手チームも**楽しい**

あなたはどの楽しさを求めますか？

子どもたちに提示した二枚のスライド。

### 記録を取りながらゲームをやってみた

ゲーム記録・分析表 (触球:レ シュート:S ゴール:G)					
ゲーム①前半		データ	触球数	シュート	ゴール
名前	青	レレレレレレレレレレレレレ	12	2	1
	赤	レレレ	3	1	/
	黄	レレレレレ	6	0	0
ゲーム①後半		データ	触球数	シュート	ゴール
名前	青	レレレレレレレレSVLGLGLG	7	0	2
	赤	レ	2	0	0
	黄	レレレSレレレ G G	5	0	2
気付き（一言）					

上の写真は3対3の3分ゲームを行った時のゲーム記録です。触球数が同じなんてことは求めていませんが、数字の上でも学習するための格差が生じていることが否めません。

そこで中、高学年では、**技能の高い子もそうでない子**も学べるサッカーを、子どもたちと考えるようにしました。

教師の願いとしては、本校の校訓にある「真実・自主・協同」の自主と協同の精神を持った人間に成長してもらいたいからです。

格差社会を是正するために法の整備が必要ならば

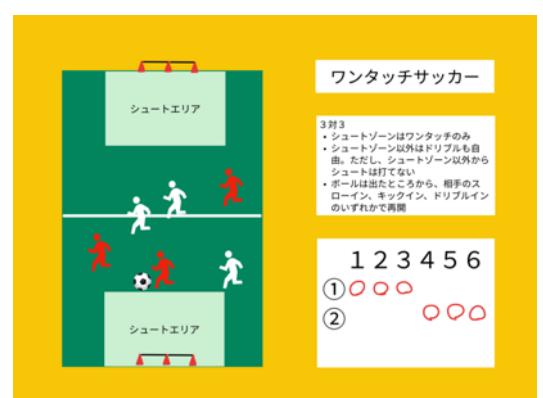
# 体育学習で

格差の生まれやすい運動にはルールの整備が必要なのか

せっかくなので「格差」も勉強してもらおうと  
『世界がもし 100 人の村だったら』をもとに、  
ワークショップも行いました。



『世界がもし100人の村だったら』  
(2008 マガジンハウス 池田香代子著)



私の方からは  
こんなルールのゲーム  
もあるよと、提示

そして子どもたちは、「誰一人取り残さない」を意識して  
話し合いとゲームを繰り返していきます。



技能の習得はもちろんですが、世の中のあたりまえも見直し、他者を思いやることのできるクリエイティブな児童の育成を目指していきたいです。